
Dark Twilight ~ 太陽の昇らぬ世界で ~

水竜のアッシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dark Twilight ～太陽の昇らぬ世界で～

【Nコード】

N2634G

【作者名】

水竜のアッシュ

【あらすじ】

この世界は太陽がない、だが魔法がある、そんな不思議な地球の世界、その世界を混沌の渦に飲み込まんとするもの達が現れる・・・少年アルディアと少女レイファが会おうとき世界の運命の歯車は大きく回り始める・・・

プロローグ（前書き）

初心者なんで文が変だったりするかもしれないのでそのときはすみません

プロローグ

これは僕達が住んでいる地球とは少し違う地球つまり平行世界のもう一つの地球の物語

20XX年 太陽は謎の科学物質「」の影響で滅んだ・・・

太陽の大きさは僕達の住む世界の太陽より小サイズだったので地球のは被害がでなかった

しかし太陽の恵みが無くなり衰退していく人類達や動物達・・・

魔法暦元年 地球にいる人々、動物達はこの世界でも生きるため進化していった

そして、人類は他種族、エルフや魚人よく言えばマーメイドなど色んな進化をとげていった

魔法暦14年 人類は大地の恩恵を受け魔法と言う神秘的な力を手に入れる

魔法暦36年 またも人類は過ちを犯す・・・第一次魔法大戦が起きる・・・

そのために朽ちていった命は人類の約3分の1・・・

魔法暦37年 「神聖ルミナ帝国」、「武力帝国ガルガンディア」、

「魔装国家フェアテリア」という三つの勢力ができ、うまい具合にパワーバランスができていき「魔法律」という法律ができ人類に平和が戻るのだった

魔法暦68年 神聖ルミナ帝国のとある村、サリナ村にある少年が生まれる。

後にこの世界の運命を変える存在となる

魔法暦85年 そして物語の歯車はまわり始める・・・

序章「運命の出会い」（前書き）

今回も初心者なんでヒロインとの駆け引きとかが変になってるかも
しれないですがどうか気にしないでください・・・
あと意見などありましたら言ってくれると嬉しいです
中傷は勘弁してほしいです・・・

序章 運命の出会い

巫女服の謎の少女「ア・・・私は・・・あな・・・世・・・運・・・
・8つの・・・跡・・・集め・・・」

.....

俺は目を覚まし呟いた

「???」また、あの夢か・・・」

最近、頻繁にこの夢を見る

「???」この夢はいつたい・・・」

俺はアルディア、アルディア「バレスト、通称アルだ

サリナ村に住んでいるヒューマンの男、年齢は今年で17になる

青色の髪でショートヘアー身長175CMのどこにでもいそうな普

通の青年だ

この家には俺と妹しかいない、4年前に両親とは死別している。

それからは妹と二人で生活している

ん?お金はどうしてるかって?それはこの村には依頼などを受ける

小さな集会みたいところがある通称ギルド。

俺はそこで仕事をしている、まあ仕事って言っても大抵は「薬草を

摘んできて」「や」「ライアの卵をとって来い」とかそんな仕事ばかり

だ。

だが、魔物いわゆるモンスターを倒しに行かなきゃならないことも

たまにある

このあたりは大体おとなしいスライムくらいしかいないから俺でも

十分倒すことができる

まあ、話を戻すがこのギルドの稼ぎで俺達は生活している

つとそろそろアイツが起こしにくる頃かな?

「???」おにーちゃん!ご飯できたよ!起きてる!?!?」

そっぴいなながら二階へ上がってきたこの少女はアリア、アリア「バレスト

髪型は青髪のショートヘヤーで髪には、かわいい髪飾りをしている14歳で身長141CMと、兄としては少し不安な身長の女の子、得意なことは家事全般でいつも家事をこなしてくれてる自慢の妹だアリア「お兄ちゃん、ご飯できてるよ早く食べないと学校遅れちゃうよ?」

アルディア「っともうそんな時間か、早くご飯食べて出ないとあいつ等に怒られるな・・・」

アリア「大丈夫!そんなことだろうと思って今日はトーストだよ」

アルディア「おお、気が利くな」アリアはこんな妹がいて俺は幸せ物だ」

アリア「もう、お兄ちゃんったら、ほら早くしないと怒られるんですよ?」

アルディア「そうだった!そいじゃ早く準備しないとね」

俺は学校に行く準備をして一階に下りトーストを口に入れ、家を出た学校と言っても生徒は約20人も満たない分校だ

っとも早く待ち合わせ場所に行かなきゃな

???「おーい、遅いぞアル」

???「遅いから置いていくとこだったぜ?」

アルディア「すまんすまん、遅れた」

???「たく、いつもこんな時間まで何してんだ?」

???「いいじゃん、そんなのそれより早く行こうよ、本当に遅刻しちゃうよ?」

???「それはまずいな、よし!アル学校まで競争だ!」

アルディア「おいおい、俺は寝起きだぜ?勝負になんないよ」

???「女の子もいること忘れないでよね」

???「わかったよ、歩いていこうぜ」

アル&???「はい」

そっぴえば紹介が遅れたなこの元気がいい男はカイ「クルス

髪は黒色で短髪の黙っていればもてそんな顔の持ち主だ、つまり美形そして俺の親友だ

そしてこっちの女はリア「ティスター
おっとりしてそんな外見だが根はしっかりしている幼馴染だ
髪型はオレンジっぽい色でロングヘヤーだ腰の辺りまで髪が伸びている

アルディア（手入れとか大変そうだな〜・・・）

リア「どうしたの？私のほう見て？」

アルディア「いや、なんもねーよ」

リア「そう？ならいいけど」

カイ「おいおい、お二人さん俺がいること忘れんなよ？」

アルディア「忘れてねーよ、そういやお前鍛冶師になるって言うてよな？どうなったんだ？」

カイ「あ〜それね、その為に今は筋トレとかしてるぜ」

アルディア「へーどれ位上達したんだ？」

カイ「斧とか振り回せる位だぜ、剣技でもお前には負けたくないんでね」

アルディア「斧は剣技にはいるのか？」

カイ「さあな？」

カイは両手を肩の位置まで上げ首を振りながら言った

リア「そろそろ着くよ二人とも」

キーン、コーン、カーン、コーン・・・

鐘の音が響き始める

カイ「うおっ！やばいぞ二人ともダッシュだ！」

アル&リア「りょーかい！」

俺達はぎりぎり学校に間に合った

そして、夕方・・・

カイ「ふう〜終わった、終わった」

リア「ん〜今日も疲れたね〜、そうだアル」

アルディア「ん？」

リア「今日時間ある？よければ3人でどこか行こうよ」

アルディア「アリアを待たせるのもなんか悪いし、また今度な」

リア「ん〜しょうがないなく絶対今度行こうね！」

アルディア「分かってるよ！それじゃ俺はこれで」

カイ「またな〜」

リア「またね〜」

俺はアリアの待っている家へと向かった

アルディア「オッス！アリア帰ったぞ〜！」

家のドアをバンっ！と開けながら言った

.....

アルディア「ん？誰もいないのか？」

ふと机を見ると置き手紙があった

アリア（兄さんへ 少しカルナの森まで行ってきます夕方までには戻るので心配しないでください アリア）

アルディア「ん？まてよ・・・もう夕方じゃないか！時間を必ず守るアリアの帰りが遅いなんてなにかあったのかもしれない！」

アルディア「なにかあるかもしれないし、これを持って行くか」

俺は鉄製の剣を腰に挿し不安を感じながらカルナの森に急いだ

アルディア「アリアー！！いるかー！！いたら返事してくれー！！」

俺はカルナの森を走りながら叫んだ

アルディア「いない・・・のか？すれ違いになったのか？仕方ない、いったん家に戻ってみるか・・・」

アルディアが家に帰ろうとしたその時！！

???'「きゃあああああ！！！」

アルディア「悲鳴っ！？アリアか！？」

俺は声の聞こえた方向へ走った

???'「きゃあああああ！！！」

アルディア「おい！大丈夫か！」

見知らぬ少女が大きな魔物の襲われている光景が目に入る

アルディア「おい！その君！ここは俺に任せて君は逃げるんだ！」

少女は俺の声に気づいて逃げようとするが大きな魔物がそれを追う
アルディア「くそっ!!」

俺は腰の剣を抜きその魔物へ切りかかった

アルディア「うおおおお!!」

ガキンツ!!と鈍い音をたて剣を弾き返される

アルディア「なにつ!？」

アルディア(なんだ、この魔物は……)

体は緑色、身長は2M越えて目は一つ右手には大きな鎚のような物
を持っているこいつはオーク

人の言葉は理解できないが知能は持っているスライムとはわけが違
う中級モンスターだ……

アルディア「仕方ない、俺が時間を稼いでる間に君は逃げろ!!」

そう言うともう一度オークへ切りかかる

アルディア「うおおおお!!」

やはり、ガキンツ!!と鈍い音をたてるだけで剣を弾かれる

アルディア(すまない……アリア、帰ることができないかもしれ
ない……)

そんなことを思っていると後ろから声が聞こえる……

???「マナよ……偉大なる大地の母よ……」

アルディア(なんだこれ?歌?)

しかしそんなことを考えている暇はないオークが目の前に迫ってき
ている……

アルディア「おい!そんなところでぼさつとすんな!早く逃げるんだ
よ!」

しかし少女はやめない

???「……勇氣ある物に聖なる力を……!」

???「レイスト!!」

少女が叫んだ瞬間アルディアの体が光り始める……

アルディア「なんだ、これ……、力が湧いてくる……これなら、
勝てる!!」

オーク目掛けてアルディアは剣を振りかざす！

アルディア「斬空剣ざんくうけん！！！」

轟っ！！と音をたて鎌鼬のような衝撃波がオークをめがけ飛んでいくそしてオークを見事に真つ二つにした

オーク「ぐつぐおぐおおおあああ！！！」

叫び声をあげながらオークは無へと還っていった……

アルディア「……ふう〜、死ぬかと思った……」

アルディア（あの力はいつたい……あの歌は……）

???「あの〜？」

アルディア「うおっ！！！」

いきなり声をかけられ驚く

???「ひゃあっ！いきなり大きな声をあげて驚くなんて失礼じゃないかな〜？」

アルディア「いきなりだったから驚いてしまった……すまないな」

???「いいよ別に、こっちは助けてもらってるんだしね、そういえば名前聞いてなかったね、なんていうの？」

アルディア「俺の名前はアルディア＝バレスト、通称アルだよろしくな」

???「うん、私はね〜レイファ＝ティナスだよ、よろしく〜」

アルディア（この子、レイファって言うのか……髪型はリアみたいに髪が腰まで伸びている髪の色は薄い綺麗な黄色で身長は、ぱつとみ160CM前後と言ったところか、旅をしているのかコートを羽織っている、服装は白いジャケットのような服と緑のミニスカそして白いニーソックスと男心をくすぐる格好だ、あと特徴があるのは帽子を深くかぶってるところかな）

アルディア「ヘーレイファっ言うのか、てか聞きたかったんだけどさ」

レイファ「ん？なに？3サイズ以外なら教えてあげるよ？」

アルディア「なに！？その古典的リアクション！？」

レイファ「あはは〜」

レイファは無邪気に笑う

アルディア「まあ、いいや、聞きたいことってのはあの歌みたいなやつのことだ、なんか叫んだら俺の体が光るし、びっくりしたよ」
レイファ「あれ？魔法って知らない？魔力、またはマナって言う力を使って決まった歌を歌うと神や悪魔の加護を受けることが出来るんだよ」

アルディア「魔法か、授業で習ったことはあるが本当に実在するとは・・・」

レイファ「へへ〜驚いた？」

アルディア「ああ、マジでびっくりした、それとありがとな」

レイファ「ふえ？」

アルディア「その魔法のおかげで俺は勝てたんだから感謝して当然だろ？」

レイファ「えへへ、どういたしまして〜」

レイファはテレながら言った

アルディア「てか気になってたんだがその耳はなんだ？少しとんがってるけど？」

レイファのかぶっている帽子からチラツと見えている

レイファ「ひゃっ！」

レイファはビクビクしながら口を開きこう言った

レイファ「お兄さんもこの耳を差別するの？確かにハーフェルフなんてヒューマンにしては化け物かもしれないけど・・・それでも・・・」

レイファは泣きながらそう言った・・・

アルディア（辛いことがあったんだとすぐ理解できる・・・）

アルディア「差別なんかするかよ！！」

レイファ「え？」

アルディア「命の恩人だし、と言うかそんな耳程度で差別なんてするかよ」

レイファは驚くように言った

レイファ「ハーフエルフなんだよ？エルフとヒューマンのハーフなんだよ？怖くないの？恐ろしくないの？」

アルディアはレイファの頭を撫でながら言った

アルディア「馬鹿野郎、こんなに泣いたり笑ったりできる奴が化け物な訳あるかよ、安心しろ俺だけは絶対お前を差別なんてしない、だから泣くな・・・」

レイファ「アルディア・・・」

レイファ「ううう・・・」

アルディア「わわっ！どうした！？どうして泣いてんだ！？」

レイファ「嬉しくつい涙がでちゃった・・・えへへ・・・」

アルディア「そうだよお前は笑ってる方がずっと可愛いぞ」

レイファ「アルディア・・・うん！ありがとう・・・」

「序章」運命の出会い

END

二章 新たな家族 (前書き)

この世界で朝や夕方など分かるのは月の光と魔法の力です

太陽の輝きには劣りますがけっこう明るいです

無理な設定なのは分かりますが気にしないでくれると嬉しいです

二章 新たな家族

アルディア「つといけない！アリア忘れてた！」

レイファ「ん、アリア？誰？彼女？」

アルディア「違うから！妹だから！彼女いないから！・・・なんか自分で言ってる悲しくなってきた・・・」

レイファ「へへ妹さんか」

アルディア「俺への慰めはないの！？」

レイファ「あれ？悲しんでたの？そんなことより妹さんだよ！アルディア」

アルディア「そんな事って・・・」

レイファ「ほら、いじけてないで探さないと、もう夜だよ」

アルディア「確かにいじけてる暇はなさそうだ」

レイファ「それでどこから探すの？」

アルディア「そうだな、森にいないみたいだから、ひよとすると家にいるかもしれない」

レイファ「んじゃ、アルディアの家にGO!!」

レイファは上機嫌で歩き始める

アルディア「おいレイファ、行くのはいいが、俺の家知ってるのか？」

レイファ「あははへそういえば知らないんだっ」

アルディア「まったく、レイファは本当に天然さんだな」

レイファ「えへへそれほども」

アルディア「褒めてねーよ・・・、まあいいや、さっさと帰るか」

レイファ「おー！」

こうして俺とレイファは森を後にした

アルディア（家に明かりが灯ってる、よかった・・・アリアはちゃんと帰ってきてたんだな・・・）

俺はドアノブに手をかけ扉を開く

するとアリアが泣きながら抱きついてきた

アリア「おにいちゃん！どこ行ってたの！！すごく心配したんだよ！？」

アルディア「すまないなアリア、心配かけて・・・」

アリア「ぐすつ・・・よかった・・・」

アルディア「でもアリア、お前夕方に帰るって書いてたよな？」

アリア「うん、書いてたよ、それがどうしたの？」

アルディア「俺が帰ってきたとき夕方だったのにお前の姿がないから心配して森まで行ってきたんだぜ？」

アリア「え？でも私夕方には帰ってきてたよ？」

アルディア「んぐ、じゃあ、すれ違いになっちゃったんだなきつと・・・」

アリア「心配かけたんだね・・・ごめんなさい・・・」

アリアの頭を撫でながら俺は言った

アルディア「もう、気にするな、俺はお前が無事ならそれでいいんだ・・・」

アリア「おにいちゃん、えへへありがと、今度からはおにいちゃんと行くね」

アルディア「おう、行くときはちゃんと俺を連れて行けよ」

アリア「うん！それでおにいちゃん、気になってたんだけど・・・」

アルディア「ん？」

アリア「おにいちゃんの後ろにいる女の人は誰なの？」

アリアは、はっ！と何か思いついたようにこう言った

アリア「おにいちゃんもしかしてナンパ？それとも誘拐！？私おにいちゃんをそんな風に育てた覚えはないよ！？」

アルディア「いや確かにこの4年間はお前に飯とか作って貰ったが・・・てか、誘拐じゃねーよ！」

アリアは首をかしげながら

アリア「じゃあ、どうしたの？ナンパでも誘拐でもなければ何なの？」

俺は森での出来事を話した・・・

アリア「そっか〜おにいちゃんを助けてくれてありがとう、レイファさん！」

レイファ「いや、お礼なんて、私もアルディアが来なかったらどうなってたか・・・」

アリア「そうだ！今日はもう遅いし家に泊まっていつてよ！うん！それがいい！楽しみだな〜おにいちゃんと私以外で夜ご飯食べるのって久しぶりだしね！」

アルディア「そうだな・・・4年ぶりか・・・」

アリア「うん！今日は腕によりをかけて作っちゃうよ！」

アルディア「お〜それは楽しみだな〜、な！レイファ」

レイファ「うん、そうだね、でもいいの？私みたいなハーフエルフが家に泊まるなんて・・・」

アリア「エルフなんて関係ないよ！私達はもう友達じゃない！」

レイファ「友達・・・うん！友達だね、えへへ、うれしいな初めてのお友達だよ」

レイファは目に涙を浮かべながら言った

アリア「だから今日は自分の家みたいにくつろいでってね」

レイファ「うん！」

アルディア（うんうん、やっぱり女の子は笑うのが一番だな・・・）

アリア「ほら、おにいちゃん！ぼさつとしないで手伝ってよ！」

アルディア「おう！任せとけ！」

こうして楽しい夜ご飯の時間が過ぎていった・・・

アルディア「ふう〜腹いっぱいだぜ〜」

レイファ「うん！とっても美味しかったよ〜」

アリア「えへへ、ありがとう〜」

アリア「そういえばレイファさんはどこに住んでるの？」

アリアのこの質問にレイファは顔を曇らせ言った・・・

レイファ「私の村はね、滅ぼされたの・・・黒い鎧をまとった騎士達に・・・」

アリア「えっ？」

アリアは驚き声をあげた、レイファは話を続ける・・・

レイファ「あつというまだった、無抵抗な私達を次々に殺していったの・・・」

アルディア「くそっ！なんて奴等だ！！」

レイファ「私はそんな中、死に物狂いで逃げた、そして村へ村へと渡っていった・・・けどどこでも私がハーフェルフだからと差別した・・・とても苦しかった・・・」

アルディア「レイファ・・・」

レイファ「でも、平気だよ、だって二人にあえて私幸せだから・・・

」

アリア「帰る場所がないなら家に住みなよ、ね！おにいちゃん！」

アルディア「ああ、そうだな、これも何かの縁だ、お前さえよければこの家にいるといいよ」

レイファ「二人とも・・・ありがとう、これからよろしくね！」

アルディア「おうっ！」

アリア「うんっ！」

二章 新たな家族

END

三章へ平穩な日常へ (前書き)

今回も戦闘ないです (苦笑)

三章 平穏な日常

巫女服の謎の少女ク・・・「アル・ア・私はク・・・あなた・・・世界・
運・・・8つの・・・跡・・・集め・・・そし・・・魔・・・阻止
して・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俺は目を覚まし呟いた

アルディア「また、あの夢か・・・」

最近、頻繁にこの夢を見るな

アルディア「この夢はいつたい、しかし今日はなんかいつもと違っ
たような・・・？」

つとそろそろアイツが起こしにくる頃かな？

レイファ「おーい！朝だぞー！早く起きろー！！」

アルディア「ん？アリア？」

レイファ「アルディア 寝ぼけてるのかもしいけど、女の子の
名前を間違えるなんて惨劇の幕開けだよ」

アルディア「そんな、ニコニコ顔で言われても説得力ねーぜ？」

そっぴや昨日からこの家に住むようになったんだっけ、いかん、い
かん忘れてたぜ・・・

レイファ「あはははでも三角関係はドロドロしてて恐ろしい物だよ
？」

アルディア「いや、妹と間違えただけじゃん、てかアリアとレイフ
アとのドロドロな関係なんて想像できねー・・・」

レイファ「これからは間違えないようにしたまえ」

とレイファは笑いながら言った

アルディア（ふう、この調子なら大丈夫かな？これまでレイファは
辛いことがありすぎたんだ、せめてこれからは笑って暮らしていっ

た方がいいよな、うん)

レイファ「ん？どうしたの？いきなりうなずき始めて？頭おかしくなったの？」

アルディア「お前にだけはは言われなくなかったよ・・・」

レイファ「ん？それどう考えてもけなしてるよね？」

アルディア「ご想像にお任せするよ・・・」

レイファ「まあ、いいやご飯できてるからすぐ下りてくるんだよ」

アルディア「りょーかい！」

アルディア(今日は学校は休みだから、あとでギルドに顔出しに行くかな?)

俺はそんなことを考えながら一階に下りていった

アリア「おにいちゃん、おはよ〜！」

アリアは元気にそう言った

アルディア「おっつ！愛する我が妹よ！それで今日の朝飯は何なんだい？」

アリア「おっおにいちゃんに言ってるのー！」

アリアはも〜と言いながら少し照れつつ怒っていた

アルディア「悪い、悪いアリアが可愛いから、ついからかいたくなるんだよ」

俺がそう言つと

レイファ「あれ？アルディアってロリコンだったんだ〜これはメモしとかないと・・・」

マジでメモ紙持ってきてメモし始めた

アルディア「おいおいっ！マジやめろっ！勘違いされるから！」

レイファ「え〜だって事実じゃん」

アルディア「いやいや、俺流の朝の挨拶だから！」

アリア「あ〜漫才やってるとこ悪いんだけど、ご飯冷めちゃうよ？」

アルディア「そうだな、早く食べなきゃな」

レイファ「そうだね、リアちゃん冷めると勿体無いもんね」

アリア「うんっ！でもそのリアって呼び方は・・・その・・・」
レイファ「ん？いやなの？」

アリア「嫌っていうか、紛らわしいと言うか・・・」
レイファ「ん？紛らわしい？リアって名前が？」

そういうときなりドアが開き

リア「ハ口！誰か私を呼んだ？」

カイ「よっ！お邪魔すっぜ、アル」

そういつて家の中にリアとカイが入ってきた

アルディア「おいつ！ノックぐらいしろよ！いきなりだとビックリするだろ！」

カイ「悪いな、リアの事を喋ってたみたいだから内容聞きたいとリアが言つてな、止めようとしたんだが言うこと聞かなくて・・・悪いな」

カイは本当に申し訳なさそうに言った

アルディア「いや、気にしてないからそんなに落ち込むなよ、マジで」

カイ「だが・・・」

そこへリア話に割り込み言った

リア「っと！その前にその子の事紹介してくれない？てかアルディアもしかして誘拐・・・？」

カイはレイファに気づきこう言った

カイ「おいつ！ナンパなら俺を誘えと言ってるだろ！」

アルディア「お前らもアリアと同じリアクションかよ！俺そんなに誘拐とかナンパとかしてそうに見える？」

アリアとカイとリアは声をそろえて言った

三人「うん」

正直かなり傷ついた・・・

アルディア（俺そんな風に見られてたのかよ・・・）

となりでレイファが慰めてくれている・・・

アルディア（マジ、人の温もりっていいな・・・）

俺はそんなことを思っていると

リア「冗談だよ、そんなに落ち込まなくても」

カイ「いや、確かに俺もこんな風に言われたらへこむかも・・・だからスマン！」

アリア「おにいちゃん、ごめんね」

アルディア「マジでへこんだぞ」

リア「ごめん、ごめん、そんなことよりその子の紹介してよ」

アルディア「そんな事って・・・あれ？なんかデジャブ？まあ、いいや」

俺は森での出来事を話した・・・

リア「そんな事があつたんだ・・・」

カイ「何はともあれ、お前が無事でよかつたぜ」

二人が心配してくれたのにグツときて目頭が熱くなってきた・・・
アルディア（やつぱは持つべきものは友だぜ・・・）

リア「そういえば、アル」

アルディア「ん？なに？」

リア「その黒い鎧を着た人たちについて私知ってるかも・・・」

レイファ「それ本当なの！？」

リア「うん、たぶん・・・アルはギルドマスターのジンさん知ってるよね？」

アルディア「ああ」

ギルドマスターのジンさんってのはこの村のギルドの一番えらい人のことだ

リア「で、その、ジンさんが言ってた話ではヒューマンではない知能の高い種族の村をおそってるんだって・・・」

アルディア「それ、本当なのか・・・？」

リア「分かんない・・・偶然通りかかった時に旅人さんと話してるのを聞いただけだから・・・」

アルディア「で、その旅人さんとやらは？」

リア「分かんない・・・でも銀髪で黒いコートを着ていたわ」

アルディア（銀髪で黒いコート・・・覚えといて損はないよな・・・）
アルディア「それじゃあ、俺はジンさんに話を詳しく聞いてみてくるかな」

カイ「盛り上がつてるとこ悪いが今日はジンさんはとなりの村に行っているから明日にならないと帰ってこないらしいぞ」

アルディア「なんでそんなこと知ってるの？」

カイ「親父が言ってたのさ」

アルディア「へへロンディアさんがね」

ロンディア・クルス、ごろ悪いが気にする程でもない、ロンディアさんは新生ルミナ帝国がおさめるこの大陸、「アストラル大陸」では名の知れた鍛冶師だ

カイ「ああ、今日会いに行ったら留守だったらしいぜ」

アルディア「ロンディアさんがジンさんに？」

カイ「ああ、何でも武器を作ってくれて依頼だったらしいよ」

アルディア「へへでもロンディアさんって大抵の仕事断っちゃうんじゃない？」

そうロンディアさんは自分の興味のある仕事しか受けなくても作る物が超一流だから誰も文句は言わないらしい

カイ「ああ、なんでも約2Mもある細長い剣を作ってくれとのことだったらしい」

アルディア「2Mもある剣！？そんなの振り回せるの？もしかして依頼者つて大男？」

カイ「いや、俺達とあんま変わらないらしいぜ？それとすごく腕のたつ奴らしい」

アルディア「へへ世界は広いな」

カイ「そうだな」

リア「ちよつと話が盛り上がつてるとこ悪いんだけど私たちのこと忘れてない？」

カイ「いや！そんな事・・・あるかも・・・」

アルディア（相変わらず素直な奴だぜ・・・）

リア「そうだ！今日アル暇なんだよね！」

アルディア「ああ、ジンさんいないみたいだしね」

リア「なら、レイファさんとの親睦を深めるために遊びに行こう」

レイファ「いいね〜どこ行く〜？」

アリア「楽しみだな〜」

アルディア「もう話が進んでるな・・・」

カイ「ああ・・・」

俺は冷えた飯を食いながら明日のことを考えていた・・・

アルディア（明日でレイファの村を滅ぼした奴らが分かるかもしれない・・・でも、分かったからといって俺に何ができる・・・？）
そんなことを思っていると

リア「今日は北の高台でピクニックで決定〜！」

レイファ「楽しみだな〜」

アリア「腕をふるってご馳走作らないと〜」

女性陣は早くも盛り上がっていた

カイ「今はそんな難しく考える事はねーよ、なるようになるさ」

カイは女性陣に聞こえないように俺に言った

アルディア「ふう、お前は何でもお見通しか・・・」

カイ「まあ、伊達に親友たちやってないってことだ」

アルディア「さんきゅーな、カイ」

カイ「いいってことよ！俺ら親友たちだろ？」

アルディア「ああ、そうだな・・・」

俺はこの時、気づいていなかった・・・

俺達の平穏な日常がこんなに簡単に終わりを告げるなんて・・・
だからと言って知っていたとしても逃れることの出来ない運命だろ
う・・・

こうして俺達の平穏な最後の日常はピクニックに行くことになった。
・
・

三章〜平穩な日常〜

END

三章 平穩な日常 (後書き)

次章から戦闘が増えてきます

戦闘って書くの難しいんだよね

でもがんばって書くので応援してくれると嬉しいです

四章 黒の十二騎士団 (前書き)

今回は敵組織の存在が少し分かる話です
感想や意見があったら言ってください！

四章 黒の十二騎士団

巫女服の謎の少女ク・ナ「アルディア・私はク・ナあなたは・・世界の運・を・・8つの・宝・・跡・・集めて・・そして・・魔王・・阻止して・・」

アルディア（またこの夢？）

そんなことを思っている

巫女服の謎の少女ク・ナ「アルディア・・あな・・村に・危機が迫っ・・気を・・」

・・・・・

アルディア「あの巫女さんは俺に何が言いたかったんだ？俺の村に危機・・か・・」

こんなに平和なのに危機・・か・・

そんなことを思っていると

レイファ「おーい！起きろ！朝だぞ！」

アルディア「今日もレイファか」

そう言うと、レイファは頬を膨らませながら言った

レイファ「アリアじゃなくて悪かったね！ふんだ！アルディアの口リコン！」

アルディア「ちょっ！ロリコンって！てかいつアリアじゃないと嫌なんて言ったよ」

レイファ「じゃあ、アリアと私どっちに起こしてもらいたいかはつきり言ってよ！」

アルディア「おいおい・・何むきになってんだよ・・」

レイファ「で！どっちなの！」

俺の話に耳を傾ける気はないらしい・・

アルディア「ん？どちらかと言うとやっぱりレイファかな？」

俺はそう言つと

レイファ「そつそんな・・・真顔で言われると照れるよ」

なんか誤解されてしまったようだ・・・

アルディア「べっ！べつに変な意味は無いからな！誤解すんなよ！」

レイファ「えへへ分かつてるよ」

たぶんこいつは理解できてない・・・と思ひながら諦めて言った

アルディア「まあいいや、で飯が出来たのか？」

レイファ「うん、出来てるよ早く用意して下りていてね」

アルディア「りょかい」

アルディア（今日はジンさんに黒い鎧の騎士について聞き行かないとな・・・）

アルディア「それにしても危機・・・か・・・嫌な響きだな・・・」

なにも起こらなければいいなと思いつつ、俺は二階を後にした・・・

アリア「あつおにいちゃん、おはよ」

アルディア「ああ、おはよう」

アリア「おにいちゃん、元気ないね・・・どうしたの？」

アリアは心配そうに俺の顔を見る

アルディア「いや、ちよつとね・・・、今日でレイファの村を襲つ

た奴等のが分かる思うとさ・・・」

アリア「不安・・・なんだね・・・」

アルディア「ああ・・・」

俺は飯を食つてギルドに行く準備をした・・・

アルディア「じゃあ、行つてくる」

アリア「うん、行つてらっしゃい」

俺が出ようとするレイファがこつちに駆けてきて言った

レイファ「何か嫌な予感がするんだ・・・だからこの剣ぐらひは持

つていつて・・・」

不安そうなレイファの頭をそつと撫で言った

アルディア「ああ、行つて来る・・・」

俺は剣を腰にさし、家を後にした・・・

俺はギルドの前で想像を絶する光景を目にする・・・
アルディア「なんだよ・・・これ・・・」

ギルドの周りにはたくさん黒い鎧を着た兵士がいるのだ、数は数人と言う生易しい物じゃない・・・30人は軽くいる・・・まるで軍隊だ・・・

アルディア（こいつ等がレイファの故郷を・・・）

怒りが込み上げて来るのが分かる・・・

アルディア（くそっ！この数じゃ絶対勝てない・・・今は無視するしかないな・・・）

俺は冷静になるため深呼吸した・・・

アルディア（よし・・・行くか・・・）

俺はギルドに向けてその足を動かし始める・・・

ギルドからジンさんと知らない男の声がする・・・

???「おいおい、いつまでしらばっくれるつもりなんだ？俺達はこの村にエルフの生き残りがいるって聞いてこんなところまで来てんだぜ？さっさと白状したらどうなんだ？あゝ！！？」

アルディア（誰だ？こいつ・・・こいつらの隊長か？エルフって言うてたな・・・やはりこいつがレイファの村を・・・）

俺は盗み聞きをやめギルドに入った・・・

ジン「だから知らないと言っているだろう！！！」

???「だから、いい加減吐けよ、マジでぶっ殺すぜ？」

俺は隊長らしき人を見て思った

アルディア（なんだこいつ、デカイ・・・2mくらいある身長に筋肉質な肉体、体には大きな頑丈そうな鎧、そして背中には2m位ある斧をさしている・・・）

ジンさんは俺に気づいて言った

ジン「おい！アル！今は危険だ！早く帰るんだ！」

デカイ男も俺に気づいたようだ・・・

???「あゝん？テメエ誰だ？こんな忙しい時に・・・俺は早くあの逃げ出したエルフのクソ女を血祭りに上げてーてのによゝ！！！」

俺は頭に血が上った・・・こんなにムカついたのは多分生まれて初めてだ・・・

アルディア「テメエなのか・・・」

俺は静かに言った・・・

???「あゝん？なんだつて？」

アルディア「テメエなのかと聞いてるだ！！レイファの村を襲ったのは！！！」

デカイ男は顔をうざったらしく、にやつかせ言った・・・
???「ほゝ、ガキ、テメエなんか知ってるんだな？」

アルディア「そんな事はどうでもいい！！テメエがやったのかと聞いている！！！」

デカイ男はイライラした顔で言った

???「おい、ガキが俺様にテメエだと？なめてやがる・・・確かに殺つたのは俺だぜ？最高だったぜ？あの悲鳴堪らなかつた、しかもまたここで聞けるとは・・・俺も案外ついてんな？おい！！」

男は笑っている・・・人を殺したのに平然と・・・

俺は脳の血管がぶち切れるかと思う位、きれた・・・

アルディア「テメエだけは許さない・・・許さない！！」

???「ほゝ許さないか・・・じゃあ？どうする？」

男はまだ、にやついていやがる・・・

アルディア「ここじゃ迷惑がかかる・・・外で勝負だ・・・絶対殺してやる！！！」

???「この俺様を殺す？言うじゃないか、いいだろうとお望みどうり殺してやるぜ」

ジン「やめるんだ！お前では到底かなわない！！命を無駄にするな！！！」

・・・ジンさんが何か言っている・・・でも俺の耳には届かなかつた・・・届かない位1つのことを考えているからだ・・・この男を殺すと・・・

???「挨拶が遅れたな？冥土の土産に教えてやるぜ？俺様は黒の

十二騎士団の一人、NO.12 鋼鉄の豪腕、レイグ＝ストロング様よ!!!」

アルディア「そんなことはどうでもいい!!! テメエは・・・俺が殺す!!!」

レイグ「いいぜ? さあ来いよ? 相手してやるぜ?」

レイグはそう言うのと背中になさしている斧を手に取る・・・

俺も腰の剣を取る・・・

アルディア「いくぜえ!!!」

俺はレイグに向かって剣を構え走る・・・

アルディア「うおおおおお!!!!!!」

俺はありったけの力で剣を振り下ろす

ガキンツと音をたて剣は弾かれる・・・

アルディア「なに!?!」

レイグ「おいおい? そんな程度で俺様に喧嘩売ったのか? がっかりだぜ? じゃあ、死にな」

レイグはそう言う俺をめぐり斧を振り下ろす・・・

終わったのか? と思っていると後ろから声が聞こえる・・・

カイ「おい! ぼつーとしてんなよ!!! 早く避ける!!!」

カイだ・・・それにもう一人誰がいる・・・

アルディア(そんな事より今は・・・!)

俺は体を思いつきり曲げレイグの一撃をかわす・・・

アルディア「ふう、危なかった・・・」

レイグ「なんだ増援か? まあいい俺様を楽しませろよ?」

カイ「おい、大丈夫か? お前が冷静じゃないなんて、らしくないぜ?」

アルディア「・・・すまない、でなぜお前がここに?」

カイ「レイファちゃんがよ、お前が心配だから一緒に来てくれって頼みに来たんだよ」

アルディア「一緒に?」

レイファ「心配したんだよ!!! アルディア!!!」

確かにカイの後ろにレイファがいた

アルディア「おい！レイファ！ここにはお前の村を滅ぼした奴がお前を殺そうとしてるんだぞ！？お前は帰るんだ！！」

カイ「悪いがそうはいかないらしい・・・」

気がつくとも俺達の周りには黒の鎧を着た兵士達が俺達を包囲していた・・・

アルディア「お前は俺が守る・・・だから俺の傍を離れるな・・・いいな」

レイファ「うん！」

カイ「お暑いね〜まあいいや、さくつとこんな奴らは片付けるか！！」

カイはそういい右手に持っていた槍を構える・・・

アルディア「お前斧じゃなかったのか？」

カイ「俺は斧を振り回せるくらい筋力がついたと言いたかっただけだが？」

アルディア「そうかい」

カイ「ああ、そうなんだよ」

アルディア「すまないがレイファ力を貸してくれ」

レイファ「うん！分かった！」

レイファはそう言うのと詠唱し始めた

レイファ「マナよ・・・偉大なる大地の母よ・・・」

カイ「へ〜、詠唱なんて聞くの何年ぶりかね〜？」

アルディア「今なんて？」

カイ「気にすることはないさ」

アルディア「そうかい」

レイファ「・・・勇氣ある物達に聖なる力を・・・！」

レイファ「レイスト！！」

アルディア「力が・・・みなぎる・・・」

カイ「おお〜、いい具合に体にマナが・・・これなら・・・あれが撃てるな・・・」

カイは呟くように言った

アルディア「さあ！行くぜ！！」

カイ「十天聖者が一人、蒼天槍そうてんそうのカイ、参る！！」

二人「うおおおおおお！！！！」

アルディア「絶空斬めくくせん！！」

カイ「旋風槍せんぷうそう！！」

カイは槍を物凄い速さで槍をまわし竜巻を作る・・・

兵士達は次々と飛ばされていく・・・

カイ「ふう、あと一人・・・か」

30人あまりの軍隊はあつと言う間に全滅した

レイグ「ほゝ楽しませてくれるぜ、たつぷり時間をかけてなぶり殺してやるぜ？」

カイ「すまないが、時間が惜しいのでな、一撃で決める！！行くぞ

！！アルディア！！」

アルディア「おう！！」

俺はそう言うのと剣に意識を集中させる・・・

アルディア「雷神剣らいじんけん！！」

バリッ！！と音をたてながらが地面にそって雷がレイグに向かっていく・・・

カイ「ほう、風だけではなく雷も操るか・・・俺も負けられんな・・・

」

カイ「いくぜ！！天槍てんそうグングニル！！」

そう言うときカイは槍を投げる、その槍はレイグに向かい飛んでいく

レイグ「なら俺様もいくぜ！？斧流剣技グランザッパー！！」

大地がきしみ岩の針のようなものが俺達めがけ飛んでくる・・・

カイ「ちっ！防御が間に合わん！！」

レイファ「大丈夫！！」

そしてレイファは叫ぶ

レイファ「バリア！！」

その瞬間、俺達の目の前に紋章の描かれている壁のような物ができる

その壁にレイグの攻撃があたり俺達は無傷ですんだ

だがそれに引き換え、レイグは瀕死だった、カイが投げた槍はレイグの心臓を貫き、雷で体を焼かれていた、ただの人間なら即死だ

レイグ「まさか、十天聖者が相手だったとは……、油断した……、じゅってんせいじゃ

だがよく覚えておけ、俺様達を敵にまわすと、どれだけ恐ろしいか……、
・・・ 確實にお前らは俺様の国では指名手配物だな……、せいぜい、
残りの人生を楽しむがいい……、くっくっくっ、はあーはははは！

！」

そう言うとレイグは力尽き地面に顔をつけた……

アルディア「……終わったのか？」

カイ「いや、これからが始まりだろうぜ」

レイファ「それはそうと、リアやアリアが心配してると思うから早く帰ろう？」

アルディア「ああ、そうだな……」

カイ「今後のことも話さないといけないし、いったん戻るか」

アルディア「なあ、カイ聞きたい事がある……」

カイ「……俺の正体か……すまないが時間をくれないか？必ず

いつか話すから……」

アルディア「ああ、わかった」

カイ「……ありがとな」

俺達は三人で俺の、アリアの待つ家に帰った……

アリア「おにいちゃん！！、無事だったんだね！心配したんだよ！？」

リア「本当に心配したんだよ？」

アルディア「すまないな、二人とも……」

そんな中、カイが話に割り込んで言った

カイ「すまないが、リアとアリアに話さねばならない事がある先に聞いてくれ……」

リア「なんの話なの？」

カイ「今さっきギルドであった事とこれからについてだ」

.....

リア「そんなことが・・・」

カイ「で、今後の事だがアル、なんか提案あるか？」

アルディア「ああ」

カイ「じゃあ、教えてくれ」

アルディア「旅に出ようと思う」

リア「えっ!？」

アリア「おにいちゃん!？」

二人は驚いているがカイは驚かない

カイ「それが一番いいと俺も思うぜ、村のみんなまで巻き込んでしまうわけには、いけないしな」

アルディア「ああ、そのとうりだ」

アリア「でも旅なんて!!」

リア「・・・」

カイ「大丈夫、俺もついて行くしよ」

アリア「でも・・・」

アルディア「カイ悪いが、お前は連れて行けない・・・」

カイ「なんだと?どういう意味だ?」

アルディア「カイにはこの村を守ってほしいんだ・・・」

カイ「なるほど、筋は通ってやがるな」

アリア「どうということ?」

リア「・・・ようするに三人で出て行って、この村にまたあの騎士たちが来ても村を守る人がいないと村が危ないってことだよね?」

アルディア「ああ、そのとうりだ」

アリア「でも、レイファさんと二人だなんて!危険だよ!」

カイ「・・・俺はお前の意見に賛成だ」

アルディア「カイ・・・」

カイ「だが忘れるな、お前がピンチになった時、俺は必ずお前を助

けに行く、そしてこの村も守ってやる」

アルディア「カイ・・・うん、頼りにしてる」

レイファ「じゃあ、旅の準備しないと・・・」

アルディア「そうだな・・・」

よく見るとアリアは泣いていた・・・きつと心配、不安など色々な気持ちがあつて泣いているのだろう・・・

アリア「止めないよ、おにいちゃんが決めたことだから・・・でも絶対無事に帰ってきてよね!!」

アルディアは優しく微笑み言った

アルディア「ああ、必ずな」

こうして俺達は5人で食事を取って旅の準備をした
そして次の日の朝・・・

アルディア「じゃあ、行つて来る」

レイファ「行つて来るね、みんな」

リア「気をつけて・・・」

カイ「ああ、またな、親友よ」

アルディア「ああ、ん？そういえばアリアは？」

リア「あれさつきまでここにいたんだけど？」

アルディア「・・・じゃあ俺はそろそろ行くよ」

カイ「幸運を祈る」

俺が村を出ようとしたとき俺を呼ぶ声があった

アリア「おにいちゃん！ちよつとまって！」

アリアは駆けながら叫ぶ

アルディア「どうした？アリア？」

アリア「これ、持って行って・・・」

そして差し出されたのは真紅のマフラーだった
アルディア「ああ、ありがとう大切に使うよ」

俺はマフラーを首にまいて言った

アリア「おにいちゃん・・・元気でね・・・」

アルディア「ああ、またな」

レイファ「またね、アリア」

アリア「うん！またね！」

こうして俺達二人はサリナ村を後にした……

これが世界の運命を変える旅の始まり……

これから二人はどのような人々と出会い、別れ、そして強く成長していくのか……

四章〱黒の十二騎士団〱

END

四章〱黒の十二騎士団〱（後書き）

これからアルディアとレイファの旅が始まります
大変なのはこれからだな〱とか思ってます（苦笑）
がんばって書くんで応援してくれたら嬉しいです

五章〱初めての仲間・前編〱（前書き）

どうも、アツシユです

かなり更新が遅れましたw

すいません・・・

これからも遅い事があると思いますが暖かい目で見守ってやってください

五章　初めての仲間・前編

アルディア（どうも、アルディアです、前回旅に出て早くも三時間・町もなく村も無い、一本道を三時間歩いてるわけですよ、地図ではこんなに近そうなのに意外に遠い・・・ってなに独り言、言っ
てんだ俺・・・）

そんな事を思っているとレイファが喋りかけてきた

レイファ「アルディア、疲れたよ、休もうよ」

アルディア「そうだな、そろそろ休むか」

レイファ「うん!!」

レイファは元気に言った

レイファ「ね、アルディア」

アルディア「ん？なに？」

レイファ「あと、どれくらいなのかな？」

アルディア「結構、歩いたした後1時間位かな？」

レイファ「え、あと一時間も!!もう歩きたくないよ」

アルディア「そんな事言っても、レイファは野宿嫌だろ？」

レイファ「うん」

アルディア「なら歩くしかないだろ」

レイファ「はい・・・」

レイファはしびしび返事をした

そして一時間後・・・

アルディア「やっと着いた・・・」

レイファ「もう、へとへとだよ」

アルディア（ここがサリナ村の隣にある村、テナ村か・・・）

アルディア「じゃあ俺、宿屋行って部屋の予約して来るよ」

レイファ「じゃあ、私は村の中でも探検しとくよ」

アルディア「ああ、りょーかい」

レイファ「じゃーねー」

レイファはそう言つたとあつという間にどこかに行つてしまった・・・
アルディア「じゃあ俺は予約でも取ってくるか・・・」
女将「いらっしやい〜」

アルディア「今日部屋空いてますか？二人泊まりたいんですけど？」
女将「あら〜？そのバツジ、ジンさんのとこの人？」

アルディア「ええ、ジンさんの所で仕事してますけど・・・なにか？」

女将「いや〜ね、ジンさんにはお世話になつてるから、君は特別タダで泊めてあげる」

アルディア「本当ですか！？ありがとうございます！-！」

女将「それで二名様だよね？」

アルディア「はい」

女将「じゃあ、部屋用意しとくね」

アルディア「ありがとうございます」

女将「時間がかかるから村でも見てきたらどうでしょう？」

アルディア「そうですね、そうします」

女将「いつてらっしやい」

アルディア「はい！」

こうして俺は宿屋を後にした・・・

アルディア（さて、なにするかな？・・・そうだ！武器でも見に行くかな？）

こうして俺は武器を見に行った・・・

武器屋の人「らっしやい！何にするかい？」

アルディア「え〜と、剣はありますか？」

武器屋の人「剣ですか・・・それならこの5000Gの剣がそっちの棚にある鞘のついた剣しかないよ」

アルディア「この棚にある剣ってどうしたんですか？」

武器屋の人「いや〜俺っちの知り合いがよ〜別の大陸で庭にある剣の石像を壊したんだとよ、あつもちろん仕事でだぜ？それで壊したらこの剣が出て来たと言つ訳よ、その剣なら無料であげるよ」

アルディア「いいんですか!？」

武器屋の人「あっても、この数年売れやしない、だからお客さんにやるよ」

アルディア「ありがとうございます!!」

武器屋の人「いいつてことよ」

アルディアは鞘のついた剣を手に入れた

アルディア「あれ、この剣鞘から抜けないんですね」

武器屋の人「そうなんだよ、だから売れないんだよ」

アルディア（まあ、せつかく貰ったしとっておくかな）

アルディア「それでは俺はこれで」

武器屋の人「おう!また来いよ!!」

俺は武器屋を後にした

俺は村の真ん中辺りにある広場で休んでいた

アルディア（もう夕方か〜早いな〜）

そんな事を思っていると

レイファ「わっ!!」

いきなりレイファが俺に声をかけてきた

アルディア「うわっ!!びっくりした〜」

レイファ「えへへ〜驚いた〜?」

アルディア「ああ、心臓が止まるかと思ったよ・・・」

レイファ「そんな大げさなくまあいいや、そんな事は」

アルディア「そんな事って・・・やっぱこれ・・・デジャブ?」

レイファ「宿、部屋とれた?」

アルディア「ああ、とれたよ、しかもタダ!!」

レイファ「それ本当!？」

アルディア「ああ、なんかジンさんと知り合いらしくてね」

レイファ「へ〜ジンさんの知り合いなんだ〜」

レイファ「じゃっそろそろお腹もすいたので宿に行こ〜!」

アルディア「ああ、そうだな」

俺達は宿屋に向かった、そして夜・・・

レイファ「いや〜いっぱい食べたよ〜」

アルディア「ああ、お腹いっぱいだね」

アルディア（俺達は食事をとっていた、というかもう食べ終わってるんだけどね・・・）

レイファ「アルディア〜」

アルディア「ん？」

レイファ「今日は疲れたから先にお風呂入ってくるね〜」

アルディア「おう、俺もあとで入るかな」

レイファ「言っておくけど、覗いたら駄目だからね！」

アルディア「分かってるよ!！」

レイファ「うんっ!ならよし」

レイファは笑って言った

アルディア「ふう〜、今日は疲れたな・・・なんてっ たって4時間歩きっぱなしだったしな〜」

アルディア「今後俺達はどうなるのかな・・・」

アルディア「そんな事、今考えても仕方ないか!！さて、風呂でも入るかな〜」

こうして俺は風呂場に向かった

アルディア「いや〜いいお湯でした〜」

そんな事を言いながら俺は今日泊まる部屋のドアを開けた・・・

そこには着替えの途中なのか下着姿のレイファがいた・・・

レイファ「・・・ッ!」

俺は反射的にすまんっ!と言ってドアを閉めた・・・

アルディア「着替えてるなら、部屋の鍵くらい閉めるよな・・・」

そんなことを呟いていると中から入っていいよ

という声が聞こえた

アルディア「怒ってないのか・・・？」

そんなことを呟きながら部屋に入ると、やはりレイファがこっちをにらんでいる

レイファ「・・・見た？」

俺は冷や汗をかきながら

アルディア「いや、その、見た・・・というか、見てないというか・・・」

俺が歯切れ悪く言っていると

レイファ「どつちなのだ!!」

といつてきたので反射的に

アルディア「はいっ！見ましたっ！すいませんでしたっ!!」

と答えてしまった・・・

我ながら情けない・・・

レイファ「・・・次から気をつけてよね、また同じ様なことがあったら・・・死刑だからね」

声は普通のような声なのだから目が狩る物の目だ・・・

アルディア（次こんなことがあったら、俺の命日だな・・・）

そんなことを考えてると

レイファ「早く寝たいんだけど！電気消すよ!？」

まだ言葉にとげがある、根に持っているらしい・・・

アルディア「わかった、じゃ電気消すぞ?」

レイファ「うん、おやすみ」

アルディア「ああ、おやすみ」

こうして俺達の旅の初日は終わりを告げた・・・

五章 旅の目的・前編

END

五章〱初めての仲間・前編〱（後書き）

今回はちよつとだけ話が長いです（予定）
なので分けてました・・・

本当だよ？嘘じゃないよ？

まあ、更新には時間がかかるかもだけど
暖かい目で見守ってくれらとうれしいです

五章〈初めての仲間・後編〉（前書き）

前回のあらすじ

アルディア達はサリナ村から旅立ち、隣の村テナ村を目指す・・・

そこでアルディアは武器屋の店主に謎の剣を譲り受ける

そして宿でハプニングであったが無事一日をむかえる二人だった・・・

五章 初めての仲間・後編

巫女服の少女クロナ「アルディア……」

アルディア「また、あの夢？……」

クロナ「！アルディア、私の言葉が届いていますか……？」

アルディア「あ、ああ、聞こえる……」

クロナ「よかった……やつと繋がった……」

アルディア「君は、いたい……」

クロナ「私はクロナ、太陽の巫女」

アルディア「太陽の巫女？」

クロナ「はい、私は昔この世界に存在した惑星太陽の管理者」

アルディア「……で、その管理者がどうして俺の夢の中に……」

クロナ「それは特別な術を使い彼方の頭に直接語りかけています……」

アルディア「今までも何度か話しかけてきたよね？」

クロナ「はい」

アルディア「ありがとう」

クロナ「え？」

アルディア「君のおかげであのレイグとか言う奴を倒す事ができたから」

クロナ「……そうですね」

アルディア「……そうですね、あのお告げはそういう意味だったので」

クロナ「はい、私、太陽の巫女は大天使様からのお告げを彼方様にお伝えしたまでです」

アルディア「天使……か、空想上の物かと思っていたよ、本当にいたとはね……」

クロナ「早速ですが、彼方様は今何処へ？」

アルディア「……」

クロナ「……」

アルディア「……」

クロナ「……」

アルディア「……」

クロナ「……」

アルディア「今はテナ村だな」

クロナ「そうですね、これは好都合です」

アルディア「？」

クロナ「その、テナ村の南東にはマアト遺跡があります」

アルディア「マアト遺跡・・・」

クロナ「はい、そこには世界に8つしかない宝珠と呼ばれる物があります」

アルディア「それを取って来いと？」

クロナ「はい、この世界は今混沌の影響を受け破滅の危機に瀕しています、そのために必要らしいのですが・・・詳細は私にも分かりません・・・」

アルディア「そうか、まあいいや今は行くあてもないし、よし！いいよ引き受けるよ！」

クロナ「ありがとうございます、では大天使様のご加護を・・・」

.....

アルディア「・・・朝か」

外から鳥の鳴き声が聞こえてくる、大体8時あたりだろう・・・

レイファ「うーん、えへへへへ、もう食べられないよ」

レイファはと言うとなんとも在り来たりな寝言を呟いている

アルディア「平和だな」

そう呟きながらレイファを起こすために肩をゆする

アルディア「おーい、朝だぞ、ご飯だよ」

レイファ「うーん、食べられないってしてるじゃーん・・・むにゃむにゃ・・・」

ふう、とため息をついてしかたがないので起こすのは後にする事にした

アルディア「女将さん、おはようございます」

女将「あら、おはよう、連れの子は？」

アルディア「まだ寝てます」

俺は苦笑しつつ答えた

アルディア「あっそうだ、女将さん、マアト遺跡ってしってる？」

女将「マアト遺跡ね〜知ってるわよ〜」

アルディア「本当ですか！」

女将「知ってるけど、どうするつもり？」

アルディア「行こうと思ってるのですが・・・」

女将「私はあんまりおすすめしないよ、あそこは財宝が眠ってるって噂でトレジャーハンター達がたくさんいるのさ」

アルディア「財宝ですか・・・」

女将「まあ、行くって言うならとめはしないよ、どうする？」

アルディア「行きます」

女将「そうかい、なら地図をあげるよ、とつときな」

アルディア「ありがとうございます！」

女将「いいって、いいって、でも気をつけなよ、あそこは結構死人が出てるって噂だからさ」

アルディア「分かりました、気をつけます」

女将「がんばりなよ」

アルディア「はい！っとレイファ起こさないと」

女将「朝飯の用意はしておくからまたおいで」

女将さんは微笑みながら言った

.....

アルディア「おい、いい加減起きろ！」

俺はレイファの肩ががくがく揺れるまでゆすった

レイファ「うにゃ〜、目が、まわ、うう・・・、気持ち悪い・・・」

アルディア「よっレイファ！グットモ〜ニングー！」

俺は右手でグーってしながら言った

レイファ「・・・全然、よい朝じゃないんだけど・・・」

アルディア「もう、飯出来てんぜ？早く顔洗って来いよ！」

俺は寝ぼけたレイファをおいて一階に下りた

アルディア「女将さん、レイファ起こしてきたからもう少しで来ると思うよ」

女将「わかつたわ」

そっぴいなながら料理を持ってきてくれる

アルディア「おおっ！うまそう！」

女将「じゃんじゃんお食べ！」

アルディア「いただきますー！」

レイファ「ちよつと！アルディア！！私をおいて食べ始めようなんて薄情じゃない!?!」

アルディア「だって、レイファ遅いからさ」

レイファ「じゃあ、もつと早く起こせばいいじゃない!!」

アルディア「悪かったって!!今度から起こすから機嫌直せよ、な！」

レイファ「うう〜、・・・分かったよ・・・」

アルディア「ああ、レイファ、食べながら悪いんだけど」

レイファ「？」

アルディア「今日はマアト遺跡に行くぞ」

レイファ「マアト遺跡？」

アルディア「ああ、そこには宝珠って呼ばれる宝石があるらしい」

レイファ「どうしてそんな事知ってるの？」

アルディア「それはだな」

俺は今日見た夢の話をした・・・

レイファ「なるほど・・・うん、いいよ行ってよう！」

アルディア「おっなんか調子戻ってきたな」

レイファ「まあ、流石に覚めるでしょ」

アルディア「まあ、そうだな、あっ！女将さん」

女将「なんだい？」

アルディア「今日も泊まっていいいですか？」
女将「いいよ、いつまででも、私はあんた達が気に入ったからね」
アルディア「ありがとうございます！では今日もお世話になります」
レイファ「そろそろ行くこうか？」
アルディア「ああ、よし！行くぜ！！」
二人「お〜！！」
こうして二人はマアト遺跡を目指した

そして1時間後・・・

アルディア「ふう、やっと到着か・・・」
レイファ「うゝ、疲れたよゝ」
アルディア「ここが、マアト遺跡か」
レイファ「大きいねゝ」
森の中に約10mもある大きな建造物があった
アルディア「さてと、入ってみますか！」
レイファ「おお〜！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

アルディア「・・・道が二つに分かれてる」
レイファ「どっちにする？」
まあ、お約束の通り道が二つに分かれていた・・・
アルディア「・・・ッ！」
レイファ「どうしたの？」
アルディア「いや、何でもない・・・ただし頭痛がしたただけだ」
レイファ「大丈夫なの・・・？」
レイファは不安そうに訊ねてくる
アルディア「・・・平気だ、さて、どっちにするか・・・」

へんな感覚が俺を襲う

アルディア「なんだ？これ？右になにか？・・・きつと右になにかある・・・」

アルディア「・・・右だ、右にいこう」

レイファ「そう？じゃあレッツゴ！」

レイファはご機嫌だ、探検が楽しいのだろう・・・

俺はこんな感じでいくつもの分かれ道を進んだ

そして、なんと最深部に着いたみたいだ

十字架みたいなお墓の真ん中に紅色に輝く宝石がある・・・

アルディア「これが・・・宝珠・・・」

レイファ「綺麗」

レイファ「ねえ、ねえ！とっていいかな？取っちゃうよ？取ったよ

」

レイファは俺の意見も聞かずに勝手に宝珠を抜き取った・・・

その瞬間、遺跡がゴゴゴゴゴと音を立てた

アルディア「ッ！なんだ、なにが起こるんだ！？」

レイファ「どどど、どうしょ」

レイファはかなり動揺してあたふたしている

アルディア「ッ！これは！？」

なんと足元にあったガイコツ達が動き始めたのだ・・・

アルディア「ちっ！俺が蹴散らす！レイファは下がって！！」

レイファ「うっうん！」

そう言う俺の後ろに隠れた

俺は腰の剣をとりガイコツ達の中へ飛び込む

アルディア「うおおおお！」

俺は力いっぱい剣を振り回しガイコツ達をなぎ払う

アルディア「よし！この調子で・・・！」

そんな事を思っていると倒したはずのガイコツ達が再び起き上がる
うとする

アルディア「くっ！万事急須か！？」

そんな時奥から声が聞こえる

???「おいおい、ワイト達に剣で立ち向かおうとは、勇猛というべきか、無謀というべきか・・・」

ちよつと低い声が聞こえる

アルディア「あんたはいつたい・・・」

ガイア「あん？俺か？俺の名はガイア、ガイアⅡアシュフォード、さすらいのトレジャーハンターさ！」

そのガイアと名乗る男は

髪の色はあいいると白の混ざった色で

背中にはマント、腰にまいてある二つのホルスターには

一つずつ拳銃をさしている

ガイア「まあ、見てなお二人さん、これがこいつ等との戦い方さ！」

そう言うのと腰にある拳銃を構え、神々しく輝く弾丸を拳銃に入れたガイア「聖なる弾丸セツト！！」

ガイア「これで終わりだ、シュート！！」

そう言うのと拳銃の引き金を引く

ドウツ！！と音を立てガイコツ達の方向に弾丸が飛ぶ

ガイコツの集団の真ん中あたりでその弾丸が爆発し

ガイコツ達はうめき声を上げながら灰になっていった

ガイア「作戦終了っミッションコンプリートと」

アルディア「すげえ・・・」

ガイア「よう、坊主、大丈夫か？」

ガイアと名乗る男は気さくに話しかけてきた

アルディア「俺は坊主じゃねー！俺はアルディア！アルディアⅡバレストだ！」

ガイア「んで、そつちの子は？」

レイファ「レイファです、レイファⅡティナス」

ガイア「おお、よろしゅうな、坊主に譲ちゃん」

アルディア「だから、坊やじゃ・・・」

レイファ「譲ちゃん・・・」

ガイア「ん？なんや、譲ちゃんエルフかいなこんな所にいるなんて珍しいの〜」

レイファ「ッ！」

ガイア「大丈夫や、俺も人種じゃないしな、見てくれは人間だがこれでも列記としたワーウルフや」

アルディア「・・・つか、気になってたんだが、その喋り方はなんだ？」

ガイア「あくよく言われるわ、俺の親がこの喋り方でな、変に移ってしまったんや」

アルディア「そうなんだ」

レイファ「あの、ワーウルフって言ってましたけど、なぜ人間の姿をしているんですか？」

ガイア「おお、いい質問や、俺はワーウルフの希少種なんや」

アルディア「希少種？」

ガイア「ああ、5年に一回生まれるか生まれんかの珍しい種族なんや、でなその希少種は人間の姿をしているが能力はワーウルフの三倍はあるらしいで」

アルディア「三倍・・・」

ガイア「そういえば、譲ちゃんが持つてるのがここの財宝なんか？」

レイファ「はい、そうみたいです」

ガイア「そうか、残念や、やっと見つけたのに・・・まあええわ今回は諦めるかな」

アルディア「そうだ！ガイアさん」

ガイア「ん？なんや？」

アルディア「僕達と一緒に旅をしませんか？世界にある8つの宝珠を捜してるんです」

ガイア「8つの宝珠ね〜面白そうやないか！おっし！その話乗った！！」

アルディア「ありがとうございます！！」

レイファ「これからよろしくお願いします！」
ガイア「おう！よろしゅうな」

こうしてアルディア達は新しい仲間ガイアと共に世界に散らばる
つの宝珠を捜す旅に出かけるのであった・・・

五章 初めての仲間・後編

END

五章「初めての仲間・後編」（後書き）

どうも、アッシュです

今回は新キャラ「ガイア」の登場です！！

今後どのような展開がアルディア達を待っているのか・・・
次回も頑張りますんで応援してくれると嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2634g/>

Dark Twilight ~ 太陽の昇らぬ世界で ~

2010年10月11日12時42分発行